準貧困層のウェルビーイングは平等なのか
― 2018 年社会階層とライフコース全国調査（SSL-2018）による分断の統計分析―

小　林　　盾

［要約］

この論文は，貧困層と一般層のあいだで両者に隣接する準貧困層が，ウェルビーイングにおいて他のグループと平等なのか，不平等だとしたらどこに分断があるのか，というリサーチクエスチョンを検討する．そのために，2018 年社会階層とライフコース全国調査（SSL-2018）をデータとしてもちいた（2018 年にランダムサンプリングで実施，有効回収数 1126 人，有効回収率 40.2％）．現在の幸福感，人生の階段，生活満足度，健康の 4 つの主観的ウェルビーイングを従属変数とした．分散分析，カイ二乗検定の結果，ウェルビーイングには不平等があり，一般層がもっとも高く，準貧困層，貧困層へと悪化した．多重比較の結果，準貧困層が貧困層とサブグループを形成し，準貧困層と一般層のあいで分断ができることがあった．ただし，準貧困層と貧困層のあいだに分断はなかった．準貧困層であってもなくても，分断なくサステナブルな幸せを追求できる――そうした社会の実現のために，準貧困層に固有のリスク解明が求められる．

［キーワード］

貧困，準貧困，ウェルビーイング，不平等，分断，統計分析

1　イントロダクション

1.1　リサーチクエスチョン

貧困層と一般層のあいだで両者に隣接する準貧困層は，幸せや健康などのウェルビーイング（善き生）を他のグループと同じように享受しているのだろうか．それとも，そこには不平等があり，豊かなウェルビーイングをもてないのだろうか．

経済的な豊かさ・貧しさは，教育や就労や家族形成などライフコース（人生の軌跡）のさまざまな局面で，ライフチャンス（人生の選択肢）を拡大させたり制約させたりする．そのため，貧困や準貧困であることは，ウェルビーイングをいちじるしく悪化させる可能性がある．そこで，この論文は以下のリサーチクエスチョンにアタックする．

リサーチクエスチョン　貧困層と一般層に隣接する準貧困層は，ウェルビーイングにおいて他のグループと平等なのか．不平等だとしたら，どこに分断があり，準貧困層のウェルビーイングは貧困層と一般層のどちらに近いのか．

そもそも，社会のメンバーがなだらかに連続するなら，貧困層に隣接するグループが存在するはずである．そうした人たちを筆者は「準貧困層」とよんできた．渡辺由美子氏（NPO 法人キッズドア理事長）の提案をベースに，小林（2021）で定義をあたえて，準貧困層が固有のリスクをもちうることを指摘してきた．

1.2　定義

準貧困層はどう定義できるか．貧困層とは，世帯の収入にもとづき，等価可処分所得が貧困線（中央値の半分）未満である世帯とされる（貧困の相対的定義，たとえば岩永他 2018）．これをもとに，小林（2023）とおなじく，準貧困層を貧困層と一般層の中間に位置するグループとして定義する．

定義 1（準貧困層，一般層，貧困レベル）　等価可処分所得が貧困線以上だが，中央値未満のとき，その世帯を準貧困層とよぶ．中央値以上のとき，一般層とよぶ．貧困層，準貧困層，一般層というグループを貧困レベルとよぶ．

貧困層に隣接し，貧困層に出はいりするグループはこれまで，ボーダー層，周辺層とよばれてきた．準貧困層はそれらをふくむが，より広い範囲をカバーする．この論文でウェルビーイングは，金井（2015）を参考に，以下のとおり定義する．この論文では主観的ウェルビーイングをあつかう．

定義 2（ウェルビーイング）　ウェルビーイングとは，よい人生・生活をあらわす．そのうち主観的ウェルビーイングは，幸福感，生活満足度，健康などで構成される．

1.3　仮説

準貧困層のウェルビーイングについて，これまでなにがわかっているだろうか．

白石・白石（2010）によれば，所得が高いほど幸福感が高まる．しかし，貧困層や準貧困層がどうかは解明されていない．

小林（2023）によれば，現在の主観的幸福感に着目し統計分析した結果，準貧困層は貧困層ほどではないが幸福感を低下させる．ただし，生活満足度，健康など他のウェルビーイングへの効果は未解明である．

では，他のウェルビーイングでも準貧困層であると低くなるのだろうか．この論文ではウェルビーイングは相互に関連すると仮定し，小林（2023）と同じように低下すると予想する．

仮説 1（順序）　貧困レベルによってさまざまなウェルビーイングに不平等があり，一般層がもっとも高く，準貧困層，貧困層へと低くなるだろう．

そうだとして，ではもし 2 つのサブグループにわかれて分断があるなら，準貧困層のウェルビーイングは貧困層に近いのだろうか，それとも一般層に近いのだろうか．準貧困層は貧困層より経済的に恵まれるが，一般層ほどではない．そのため，貧困層と一般層の両方に隣接するので，ウェルビーイングが貧困層に近いかもしれないし，そうでないかもしれない．ここでは準貧困層のリスクを解明したいので，以下のように準貧困層と一般層のあいだに断絶があると想定する．

仮説 2（サブグループ）　準貧困層のウェルビーイングは貧困層に近く，貧困層と準貧困層にたいして一般層という 2 つのサブグループにわかれるだろう．

2　方法

2.1　データ

ここでは，量的データである 2018 年社会階層とライフコース全国調査（略称 SSL-2018）を分析する．主観的ウェルビーイングとして現在の幸福感のほか，生活満足度，健康などをすべて同じ尺度で測定している．筆者が代表となり実施された．

調査票をもちいた，ランダムサンプリングに基づく訪問面接調査である（調査票の後半は留置法も可）．2018 年 2 月から 5 月に実施された．母集団は日本全国の 20 ～ 79 歳個人（1938 年 2 月 1 日から 1998 年 1 月 31 日生）で，標本は層化 2 段無作為抽出法で抽出された．

有効回収数は 1126 人で，有効回収率は 40.2 パーセントである（SSL-2018 の詳細は小林 2019 参照）．分析対象は，そのうち欠損値のない 956 人である．

分析対象 956 人の内訳，平均は以下のとおりである．男性 47.9％女性 52.1％，20 歳代 8.2％ 30 歳代 13.8％ 40 歳代 18.4％ 50 歳代 18.7％ 60 歳代 21.5％ 70 歳代 19.4％，平均年齢 53.6 歳，これまで未婚 13.8％現在既婚 74.9％現在離別 6.5％現在死別 4.8％，中学校卒 7.4％高校卒 54.4％短大・高専卒 12.4％大学卒 22.7％大学院卒 3.0％，正規雇用 39.1％非正規雇用 24.6％自営業 10.3％無職 26.0％，平均個人年収 310.3 万円（中央値 300 万円），平均世帯年収 579.1 万円（中央値 500 万円），平均等価世帯年収 337.8 万円（中央値 300 万円）．

2.2　従属変数

従属変数であるウェルビーイングは，4 種類が測定された．

現在の幸福感について，「「とても幸せ」が 10，「中間」が 5，「とても不幸」が 0 としたら，以下のことはどれくらい「幸せ」だと思いますか．あてはまるものを，それぞれ 1 つお選びください．

まず，「A．現在のあなた」は，どうですか」と質問し，現在のあなたについて選択肢が 0 から 10 までの 11 段階であった．これに形式をそろえ，他のウェルビーイングを以下のように質問した．

質問 1（人生の階段）　0 から 10 までの数字が，それぞれ書かれた階段を，想像してください．「あなたが考える最高の人生」を最上段の 10,「中間」を 5,「最低の人生」を最下段の 0 とします．では，現時点で，あなたはこの階段の「何段目」にいると感じますか．（○は 1 つ）

（選択肢）0 最低の人生，1，…，5 中間，…，10 最高の人生

この人生の階段は，カントリルにより提案され「カントリルの人生の階段」ともよばれる．現在の幸福感が現在一時点の評価であるのにたいし，人生の階段はそれまでの人生全体を包括的に評価したものといえる．

質問 2（生活満足度）「とても満足」が 10,「中間」が 5,「とても不満」が 0 としたら，以下の A から K について，あなた自身は，どれくらい「満足」していますか．まず，「A 生活全般」からお答えください．（○はそれぞれ 1 つ）

（項目）生活全般

（選択肢）0 とても不満，1，…，5 中間，…，10 とても満足

質問 3（健康）「健康状態が良い」「ストレスがない」が 10,「中間」が 5,「健康状態が悪い」「ストレスがある」が 0 としたら，現在のあなたの「健康状態」や「ストレス」は，どれくらいですか．（○はそれぞれ 1 つ）

（項目）健康状態

（選択肢）0 健康状態が悪い，1，…，5 中間，…，10 健康状態が良い

この論文ではそれぞれ現在の幸福感，人生の階段，生活満足度，健康とよぶ．このうち，現在の幸福感はすでに小林（2023）によって分析されているため，この論文では他の 3 つのウェルビーイングを従属変数とする．

図 1 がそれらの分布を，表 1 が記述統計（参考まで現在の幸福感をふくむ）を報告する．記述統計から，11 段階のうち平均は 6 ～ 7 のあいだにあった．上位 6 ～ 10 となる幸せな人，人生の階段が高い人，生活に満足している人，健康な人の比率は，どれも 60％台であった．（表は省略するが）4 つのウェルビーイングの相関関係は 0.395（人生の階段と健康）から 0.718（現在の幸福感と生活満足度）のあいだであり，すべて 1％水準で有意であった．

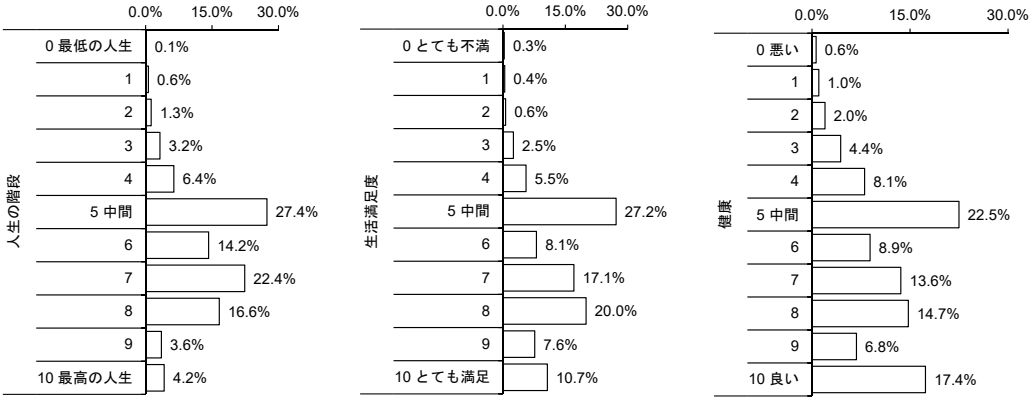

図 1　3 つのウェルビーイングの分布

（注）データは 2018 年社会階層とライフコース全国調査．N=956.

表 1　従属変数の記述統計

	平均	内訳（行 %）		
		下位 0 ～ 4	5 中間	上位 6 ～ 10
現在の幸福感	7.00	6.8%	24.2%	69.0%
人生の階段	6.24	11.6%	27.4%	61.0%
生活満足度	6.70	9.4%	27.2%	63.4%
健康	6.64	16.1%	22.5%	61.4%

（注）データは 2018 年社会階層とライフコース全国調査．N=956.

2.3　独立変数

独立変数は 3 つの貧困レベルである．定義にもとづき（等価可処分所得が測定されていないため等価世帯年収で）求めたところ，標本のうち貧困層が 12.4%，準貧困層が 34.4%，一般層が 53.1% であった（N= 貧困層 119，準貧困層 329，一般層 508）．

3　分析結果

3.1　平均の比較

貧困レベルによってウェルビーイングに不平等があるのか．仮説 1 どおりなら，人生の階段，生活満足度，健康というウェルビーイングそれぞれが，貧困層，準貧困層，一般層という 3 つの貧困レベルによって異なるはずである．

図 2 が人生の階段，生活満足度，健康の平均についての分散分析の結果を，図 3 が上位者である人生の階段が高い人，生活に満足している人，健康な人の比率についてのカイ二乗検定の結果を，報告する．その結果，すべての従属変数について貧困レベルによってウェルビーイングが有意に異なっていて，仮説 1 どおり一般層から準貧困層，貧困層の順で低くなっていた．とくに生活満足度で落差がおおきく，一般層は貧困層より（図 2 中央図より）11 段階で 1.18 高く，（図 3 中央図より）

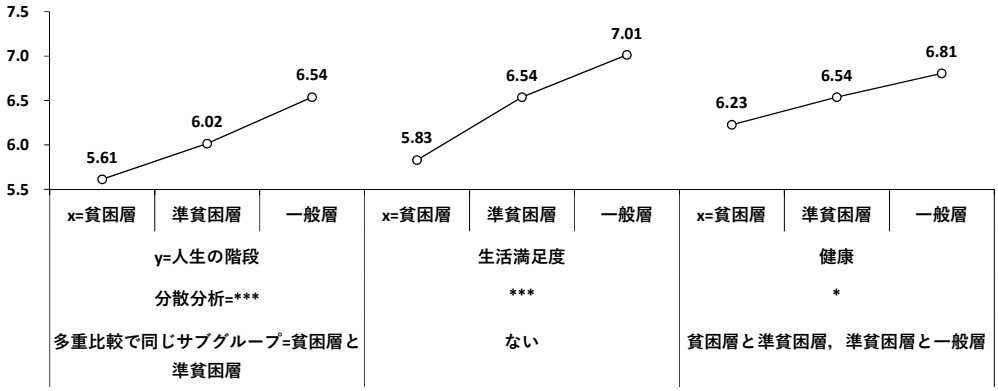

図２　貧困レベルを独立変数，３つのウェルビーイングを従属変数とした平均の比較

（注）データは 2018 年社会階層とライフコース全国調査．N=956（うち N= 貧困層 119，準貧困層 329，一般層 508）．*5%，**1%，***0.1% 水準で有意．多重比較は人生の階段と健康度で等分散性を仮定できたため Tukey 法を，生活満足度で仮定できなかったため Games-Howell 法をもちい，貧困グループ同士で 5% 水準で有意な差がない場合同じグループとした．

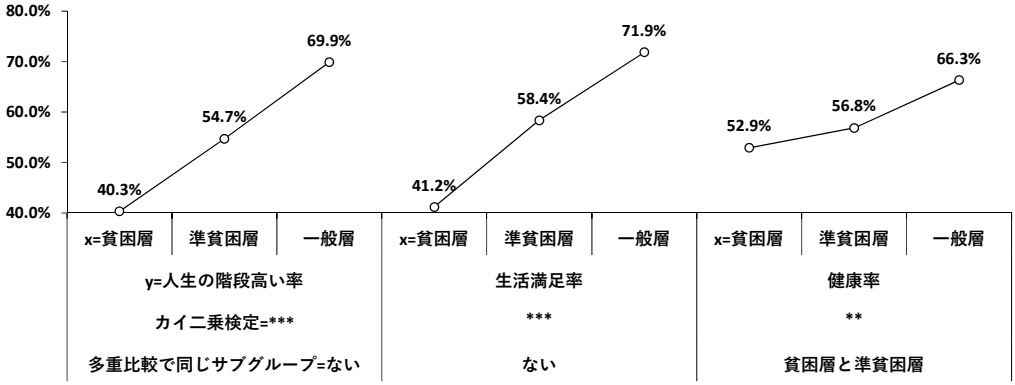

図３　貧困３グループを独立変数，３つのウェルビーイングにおける上位者の比率を従属変数とした比率の比較

（注）データは 2018 年社会階層とライフコース全国調査．N=956（うち N= 貧困層 119，準貧困層 329，一般層 508）．*5%，**1%，***0.1% 水準で有意．多重比較は貧困グループ同士で 5% 水準で有意な差がない場合同じグループとした．

満足している人が 30.7%おおかった．

なお，図にはないが，現在の幸福感の平均，幸せな人の比率も，貧困レベルにより有意に異なり，仮説１どおりの順であった．

3.2　多重比較

では，準貧困層のウェルビーイングは，貧困層と一般層のどちらに近いのか．仮説２のとおりなら貧困層と同じグループを形成し，貧困層と準貧困層にたいして一般層という２つのサブグループとなって，準貧困層と一般層のあいだで分断があるはずである．

図２，図３が多重比較の結果も報告する．図２によれば，生活満足度の平均は差がおおきいためサブグループがなく，貧困層，準貧困層，一般層どれもが有意に異なっていた．いっぽう，人生の階段の平均は，貧困層と準貧困層で違いがなくサブグループを形成し，この２つと一般層で異なっ

ていた．健康の平均は貧困層と一般層で異なるが，あいだの準貧困層はどちらとも違いがなかった．

上位者の比率ではどうか．図3によると，人生の階段が高い人，生活に満足している人の比率は，貧困層，準貧困層，一般層ですべて異なっていた．いっぽう，健康な人の比率は，人生の階段の平均とおなじく，貧困層と準貧困層で違いなく，この2つがサブグループとなり一般層と分断されていた．

したがって，人生の階段の平均と，健康な人の比率において，仮説2のとおり準貧困層が貧困層と同じサブグループになり，一般層とのあいだに断絶があった．ぎゃくに，準貧困層が一般層とサブグループを形成し，貧困層とのあいで分断が生じることはなかった．

なお，図にはないが，現在の幸福感の平均，幸せな人の比率については，生活満足度と同じくサブグループがなかった．

4　考察

以上から，仮説1「貧困レベルによってウェルビーイングに不平等があり，一般層がもっとも高く，準貧困層，貧困層へと低くなるだろう」は，支持された．人生の階段，生活満足度，健康の平均の分散分析と，人生の階段が高い人，生活に満足している人，健康な人の比率のカイ二乗検定の結果，たしかに不平等があり，予想どおりの順序となった．

仮説2「準貧困層のウェルビーイングは貧困層に近く，貧困層と準貧困層にたいして一般層という2つのサブグループにわかれるだろう」は，一部支持された．多重比較の結果，人生の階段の平均と，健康な人の比率において，準貧困層と一般層のあいだに分断があり，それ以外で分断が生じることはなかった．

こうして，リサーチクエスチョン「貧困層と一般層に隣接する準貧困層は，ウェルビーイングにおいて他のグループと平等なのか．不平等だとしたら，どこに分断があり，準貧困層のウェルビーイングは貧困層と一般層のどちらに近いのか」に以下のとおり回答できる．

リサーチクエスチョンへの回答　準貧困層の主観的ウェルビーイングは，現在の幸福感，人生の階段，生活満足度，健康において不平等があり，一般層，準貧困層，貧困層へと悪化した．さらに，準貧困層が貧困層とサブグループを形成し，準貧困層と一般層のあいで分断ができることがあった．このように，ウェルビーイングを事例として，一般層にたいし準貧困層が貧困層とともにリスクをもちうることが，はじめて明らかにされた．

2015年に生活困窮者自立支援法が施行されたことで，準貧困層をふくむ人たちへの支援がようやくスタートした．近年では，準貧困層のリスクがこども家庭庁の審議会で言及されることもあった（第1回こどもの貧困対策・ひとり親家庭支援部会，2023年7月）．しかし，準貧困層のリスク

解明はスタートしたばかりである．

そのために，たとえば世代間の貧困の連鎖が準貧困層でどのようになっているのか，またインタビューなどの質的データでどのように裏付けられるのかが，今後の課題となるだろう．

準貧困層であってもなくても，ウェルビーイングが悪化することなく，分断なくサステナブルな幸せを追求できる――そうした社会の実現のために，準貧困層に固有のリスク解明がひきつづき求められよう．

［謝辞］

本研究は成蹊大学研究助成の助成を受けたものです（共同研究，2018 ～ 20 年度，ウェル・ビーイングのメカニズム解明への分析社会学アプローチ：データ分析と理論構築の有機的統合をとおして，小林盾代表）．本研究のデータは JSPS 科研費 15H01969（基盤研究（A），2015 ～ 8 年度，少子化社会におけるライフコース変動の実証的解明：混合研究法アプローチ，小林盾代表）の助成を受けて収集されました．

［文献］

岩永理恵・卯月由佳・木下武，2018,『生活保護と貧困対策：その可能性と未来を拓く』有斐閣.

金井雅之，2015,「ソーシャル・ウェルビーイング研究の課題」『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』1:7-22.

小林盾，2019,「コラム　2015 年社会階層とライフコース全国調査，2018 年社会階層とライフコース全国調査：多様性と代表性」小林盾・川端健嗣編『変貌する恋愛と結婚：データで読む平成』新曜社.

小林盾，2021,「総括　子供の貧困の実情と求められる支援：令和 2 年度子供の生活状況調査からのメッセージ」内閣府『令和 3 年子供の生活状況調査の分析報告書』146-152.

小林盾，2023,「準貧困とはなにか：ウェルビーイングへの影響を事例として」『アジア太平洋研究』48:85-92.

白石賢・白石小百合，2010,「幸福の経済学の現状と課題」大竹文雄・白石小百合・筒井義郎編『日本の幸福度：格差・労働・家族』日本評論社.